

民児の『み』はみんなの『み』 ～缶バッジに思いを込めて～

障がい者福祉部会
部会長 小山茂次

民生委員・児童委員として活動する時、相手に対して「支援しよう。喜んでもらおう。」という思いが心のどこかにいつもあった。そしてそれは重いものだった。

私達は昨年5月、全盲障がいである山野勝美氏と施設長の丸本武氏を南彦根のアイスーションから盲導犬とともに招き、『本人に学ぶ』と題した講話を受けた。日常生活を通して数多くの事例から山野氏の“豊かな人生観と常に人を思いやる心”に触れることができた。そして『支援の関わりは常に一方的ではなく事実を共有することである。』ということ学び取ることができた。研修の後、私は先の重かった心がだんだんと軽くなっていくのを感じた。

コロナ禍での杉の子クリスマス活動、私たちは缶バッジを製作することにした。デザイン画は“それぞれの人の顔”大人も子どもも女性も男性も缶バッジの円のなかで全てを共有し合う。楽しいこと・辛いこと・悲しいこと・伝えたいこと…。そしてその内から心の声が聞こえてくる…。思いやりの心・信頼し合う心・助け合う心…。私達は缶バッジの真ん中に大きな『み』の字を書き入れた。

“民児の『み』はみんなの『み』”

私達みんなの思いを込めた缶バッジはクリスマスメッセージとともに杉の子クラブ・杉の子作業所の彼、彼女らにプレゼントさせていただいた。そして町長、事務局、民生委員・児童委員全員にも配布した。

“お互いが支え合い皆で良くなって行こう！”という共有の願いを込めて。



学校・園等訪問 ～すこやかに育つ子どもたち～

主任児童委員



令和3年度は、11月に町内の学校・園等を訪問させていただきました。大滝たきのみや認定こども園、多賀ささゆり保育園、多賀幼稚園では、園長先生から園として大事にしている取り組みを聞かせていただき、園児さんたちの様子を参観させていただきました。年齢別に各保育室や大きな遊戯室で、指導して下さる先生方の温かな眼差しを感じながら安心して活動している姿は、とても愛おしく感じました。

大滝小学校、多賀小学校、多賀中学校では、学校の教育方針や、様々な形の支援が必要な児童生徒の様子を聞かせていただきました。授業参観では、先生の話をしっかり聞いて活動する姿や、特別支援教育支援員さんの助言を受けながら学習に取り組む姿が見られました。落ち着いた雰囲気の中で学習する姿から、日頃からの先生方の熱心なご指導がうかがわれました。

放課後児童クラブは、入所する児童の増加に伴い、2カ所で開所されています。感染症防止のため、外遊びを前半後半の2班に分けたり、おやつは予め一人ひとりのケースに入れて配るなど工夫しておられました。

子育て支援センターでは、親子で「このゆびとまれ」さんの読み聞かせを聞いている様子や、おもちゃで遊んだり、お母さん同士がお話してほっこりした時間を過ごす様子を見せていただきました。

杉の子クラブでは、一人ひとりが自分の目当てをもって、伸び伸びと活動していました。

多賀町の子ども達がこれからもすこやかに成長していけるようみんなで見守っていきたいと思います。



民生委員・児童委員

たが民児協だより

第25号

～支えあう 住みよい社会 地域から～

発行者 多賀町民生委員児童委員協議会 事務局 多賀町総合福祉保健センター「ふれあいの郷」内 福祉保健課
電話 0749-48-8115 有線 2-2021 E-mail fukushi@town.taga.lg.jp

町長のあいさつ

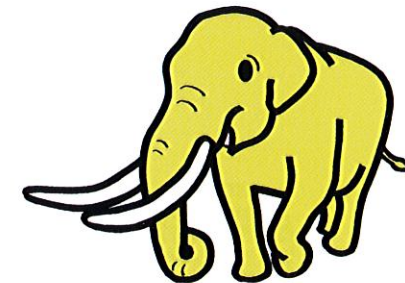
多賀町長 久保久良

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止が求められる中で、民生委員・児童委員の皆さまにおかれましては、感染予防に配慮いただきながら、地域子ども達や高齢者等の見守り活動等をはじめ様々な相談・支援に取り組んでいただいていることに対し、心より敬意を表すると共に深く感謝申し上げます。

さて、当町ではコロナ禍に加え、年末年始には例年になく大雪に見舞われました。住民の皆さんには自宅周りの除雪を優先せざるを得ない中にも関わらず、自力で除雪が困難な高齢者世帯等への除雪支援や通学路などの除雪にご協力いただき誠にありがとうございました。

新型コロナウイルスの蔓延による新たな課題も生じてきていますが、このような状況の中でも自助・互助・共助の取り組みが多賀町全体に広がり、地域で支え合い・助け合うまちが実現するよう取り組んでいるところでございます。

コロナ禍にあっても、常に住民に寄り添い地域の方々との身近な相談役として、また、行政とのパイプ役として地域福祉の中心的な役割を担っていただいております民生委員・児童委員の皆さまにとって今後も活動しやすい環境づくりに努めてまいりますので、引き続きお力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



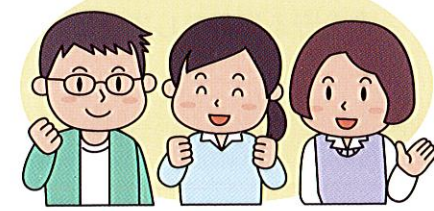
地域とのつながりを大切に

多賀町民生委員児童委員協議会
副会長 宮下 勇

平素は、多賀町民生委員児童委員協議会の活動に対してご理解・ご協力をいただき心より感謝申し上げます。2年前から発生したコロナの感染が長期化し、出口の見えない日々が続く、誰が感染してもおかしくない状況に不安が募るばかりです。

民生委員・児童委員の活動も、コロナ感染症で活動が制限される中で1期3年の区切りの年度になりました。児童青少年部会は子育て中のおかあさんへの支援のサロンは規模を縮小して開催、障がい者福祉部会は杉の子会のクリスマス会が中止のため、手作りの缶バッジ等を贈る活動、高齢者福祉部会は緊急時に備えた物品の配布等の活動を行っています。また、安否確認を兼ねた見守り活動はコロナ禍時対応の「多賀町民生委員・児童委員訪問活動マニュアル」を遵守し活動を行っています。

多賀町には34名の民生委員・児童委員が活動をしています。困りごと、悩みごとがあれば身近な相談相手としてお声をかけてください。日々の活動を大切に、感謝の気持ちを忘れず関係機関と地域の皆さんを繋ぐパイプ役として活動してまいります。ご協力、ご理解をお願い申し上げます。



民生委員・児童委員研修

広報部会長
前川正美

近年「想定外」「記録的な」異常気象による自然災害が発生している。滋賀でも起きる可能性がある震度7の地震や大規模水害から命を守る方法・対策について研修を深めた。

これまでも多くの講師を迎えての防災研修を行ってきたが、もっとも身近な「多賀町の防災」の課題に沿った研修をNHK「滋賀のこれからを考えるTV」のDVDを視聴して次の点について研修する。

- (1) 多賀町の防災、過去の災害について。
- (2) 町民を守る防災施設、基準の確認。
- (3) 災害がくるまでの時間（リードタイム）、ハザードマップの活用。公助を期待しすぎてしまうと自らの命を守りきれなくなる。犠牲者の8割が一人では避難できない人たち。

こうした課題を民生委員・児童委員としてどのような組織で避難支援をするか、高齢者・障がい者等の弱者を避難誘導支援するためにどのような対策をするか（タイムライン）について部会別に分かれ討議する。

その後も線状降水帯・梅雨前線豪雨による災害や日本海寒帯気団収束帯による豪雪災害が続いて発生した。こうした経験から高齢化社会での課題も浮上した。

近隣住民・地域住民・行政等の関係機関との連携が大切だと痛感した。

その活動例を紹介する。



～災害から命を守る行動～

近年、毎年のように各地で豪雨災害が起きています。

我が村（南後谷）でも昨年8月の豪雨により土砂災害のリスクが高まり身の危険を感じ、区長の指示のもと、全住民がB&G海洋センターの体育館に避難しました。幸いにも、人にも家屋にも被害はありませんでした。

村は過去にさかのぼること、平成2年9月の台風時に豪雨により土砂災害のリスクが高まり、全住民が当時の佐目小学校に避難しました。

それ以降、村では毎年防災の日を設定し区長以下、役員、自警団が先頭にたって区民総出で避難訓練を実施しています。その訓練で、災害の恐れが高まったとき、一人一人がどのような行動をとればいいのか

を考え、自身の身を守る行動の大切さを学んでいます。

昨年の避難時、全住民がスムーズに避難を終えることができたのも、その訓練がおおいに役立っていると感じました。

これからも、地球温暖化の影響で今まで経験したことのない豪雨・豪雪などが起き、災害リスクが高まることが予測されます。

命あつての職種です。そういう時こそ冷静に判断し、災害から命を守る行動をしていただきたいと思います。



みんなにっこり子育てサロン

児童青少年部会
部会長 富田愛子



未就園児とその保護者の皆さんを対象に、みんなで遊んだりおしゃべりしたりして、なごやかな時間を過ごしてもらうことを目的に、今年も「子育てサロン」を開催しました。

当初は10月開催予定でしたが、コロナ感染第5波の影響のため、11月に延期開催しました。

小さい子どもさんも体を動かして参加できる「たんぽぽ」さんのプログラムや委員さん紹介の親子体操で、参加された皆さんと民生委員・児童委員が、ともに楽しい時間を過ごすことができました。

今年は会場入り口で、参加された保護者さんに、今気になることを記入してもらいました。その中で多かったのは離乳食を始める時期やその内容、量などでした。グループの話し合いでも話題になり、参加者同士で情報交換もされました。後日、福祉保健課の保健師さんに紹介してもらった離乳食に関する資料をお送りしました。

次年度は、コロナウイルス感染症の流行が収まり、多くの方に参加していただけることを願っています。



もしもの時のために

高齢者福祉部会
部会長 阪東克美

近年、高齢者の単身世帯や夫婦世帯が増え、社会的孤立が顕在化しています。緊急時に備え二つの事業に取り組みました。

一つは、「SOSティッシュボックス」を見守り世帯へ配布しました。急病や事故など緊急時には、誰もがパニック状態になります。そんな時、必要な連絡先を記載した物が身近にあると有効です。そんな思いを込めて作りました。

二つ目は、「命のバトンの情報用紙」の様式の変更です。救急搬送で隊員が自宅に到着した時、的確な情報を得られるよう消防署の意見を取り入れ変更しました。搬送される病人の持病やお薬、一番状態を知っている人などをより分かりやすくしました。同時に、お年寄りが毎年書き直す手間を少なくするよう工夫しました。

皆さんから色々な声を聞かせていただくと、より有意義な活動が実施できると思いますので、よろしくお願いします。



「SOSティッシュボックス」のお届けの様子です

ありがとうございます。早速連絡先を書いて、テーブルに置いて使ってもらいます。



一人暮らしなので、何かあった時を考えて、枕元において活用します。今回はありがとうございます。